

PRESS RELEASE

新国立劇場 2024/2025シーズン 演劇
シリーズ「光景—ここから先へと」Vol.3

消えていくなら朝

蓬萊竜太が2018年に新国立劇場に書き下ろし、私戯曲的な内容としても話題を呼んだ傑作をフルオーデション企画第7弾として、蓬萊自らが演出を担い上演！



(上段 左から) 大谷亮介、大沼百合子、関口アナン
(下段 左から) 田美陽子、坂東 希、松本哲也



作・演出
蓬萊竜太



芸術監督
小川絵梨子

2025年7月10日(木)～27日(日) 新国立劇場 小劇場
2025年5月6日(火・休)10:00～ 一般前売スタート！

【写真・資料のご請求、取材のお問い合わせ】

新国立劇場 制作部演劇 広報担当 杉田亜樹
TEL: 03-5352-5738 FAX: 03-5352-5737
E-mail: sugita_a8863@nntt.jac.go.jp
〒151-0071 東京都渋谷区本町 1-1-1



作品について

—家族は無条件なんかじゃないよ。なんで、愛さなきゃいかんの。 劇作家の「僕」とその家族を巡る一晚の物語

社会での最小単位である、家族が織り成す様々な風景から、今日の社会の姿を照らし出し、未来を見つめるシリーズ「光景—ここから先へと—」第3弾は、蓬萊竜太作『消えていくなら朝』です。

蓬萊が2018年に新国立劇場に書き下ろし、宮田慶子前芸術監督の演出により初演された本作。最も身近で最も厄介な「家族」という存在を蓬萊独自の切り口で描き、その私戯曲的な内容から大きな話題と、高い評価を得て、**第6回ハヤカワ「悲劇喜劇」賞も受賞**しました。

この傑作を、この度、すべての出演者をオーディションで決定するフルオーディション企画 第7弾として、蓬萊竜太自らの演出で上演いたします。

物語は、家族と距離を置いていた劇作家の定男が恋人を連れて帰省し、18年ぶりに全員が顔を揃えた家族の前で、次回の新作で、家族のことを書いてみようと思うと切り出すところから始まります。表面的な会話から、だんだんと長年抱えてきた不満や本音が飛び出していく、ヒリヒリとした会話の応酬。「家族」だからこそ、遠慮がなく、胸を抉るような言葉が飛び出していきます。

オーディションは、2024年1月12日より公募を開始し、2,090名の応募の中から、2月初旬の書類選考を経て、3月中旬まで一次選考、二次選考を行い、6名のキャストが決定しました。

蓬萊自身を投影して描いたという、主人公の劇作家の定男（僕）には関口アナン、そして定男の兄・省吾は松本哲也、定男の妹・可奈は田実陽子、母・君江は大沼百合子、一家の家長 父・庄次郎には大谷亮介、そして定男の恋人・レイには、坂東 希が挑みます。

仕事や日常生活というそれぞれの人生と、まるで“呪い”ともとれる「家族」として断ち切れぬ絆の中で、生きていく幸せを問う渾身の作品が、作家本人の手により、再生いたします。宗教二世の問題にも斬りこんだ本作は、社会の変化と共に、2018年初演時よりもさらに鮮明で切実な物語となって立ち上がることでしょう。どうぞご期待下さい。

あらすじ

家族と疎遠である劇作家の定男（僕）は、彼女を連れて帰省する。18年ぶりに家族5人全員が揃う夜、続いていく家族の他愛ない会話。

しかし定男に対してはどれも棘がある。家族は定男の仕事に良い印象を持っていないのだ。定男は切り出す。

「…今度の新作は、この家族をありのままに書いてみようと思うんだよね。」

そして激しい対話が始まった。

家族とは、仕事とは、愛とは、幸せとは、人生とは、そして表現とは。本音をぶつけあった先、その家族に何が起こるのか、何が残るのか……。

作・演出 蓬萊竜太からのメッセージ

この作品は 2018 年に新国立劇場に書き下ろした作品です。当時の芸術監督であった宮田慶子さんから執筆のオファーをいただき、僕自身は演出をしないという大前提があったからこそ書けた作品でもありました。僕の中では結構思い切った作品でした。自分のコアのような部分に触れたり、時には叩いてみたり、踏んづけたりするような感じがありました。

今回この作品で演出をしませんか、フルオーディションでやりませんか、という依頼をいただいた際には、そう来たかと、色々な意味で震える思いをしました。間違いなく僕にとって挑戦になります。

6 名の出演者と共に模索しながら、共に悩みながら、新たな作品を生み出せたらと思っています。

スタッフプロフィール



【作・演出】 蓬萊竜太 HORAI Ryuta

劇作家、脚本家・演出家。1999 年に劇団モダンスイマーズの旗揚げに参加。以降、全公演の作・演出を務める。

2019 年の劇団公演『ビューティフルワールド』において第 27 回読売演劇大賞優秀演出家賞、2024 年には『雨とベンツと国道と私』でバッカーズアワード演劇奨励賞を受賞。

近年の劇団外公演に『中村仲蔵～歌舞伎大国 下剋上異聞～』の演出、『ひげよ、さらば』『広島ジャンゴ 2022』『首切り王子と愚かな女』『渦が森団地の眠れない子たち』、赤坂大歌舞伎『夢幻恋双紙 赤目の転生』の作・演出のほか、21 年より自身がプロデュースする演劇ユニット・アンカルをスタートさせ、『昼下がりの思春期たちは漂う狼のようだ』の作・演出など、意欲的に活動している。第 53 回岸田國士戯曲賞（『まほろば』）、第 20 回鶴屋南北戯曲賞（『母と惑星について、および自転する女たちの記録』）、第 6 回ハヤカワ「悲劇喜劇」賞（『消えていくなら朝』）を受賞。映像関連の脚本では、映画「劇場」「ピンクとグレー」、テレビドラマ「平成細雪」などがある。

新国立劇場では『消えていくなら朝』『まほろば』『エネミイ』を書き下ろしたほか、『ブレス・オブ・ライフ～女の肖像～』で演出を手掛ける。4 月 10 日より上演の Bunkamura Production2025『おどる夫婦』で作・演出を務める。

出演者プロフィール



大谷亮介 OTANI Ryosuke 羽田庄次郎(父)

1977 年、オンシアター自由劇場に入団。86 年には役者集団東京壱組を旗揚げし、座長を務めた。91 年『分からない国』などの企画・演出により第 26 回紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。2020 年『All My Sons』で第 28 回読売演劇大賞優秀男優賞を受賞。最近の主な出演に映画『逃走』『岸辺露伴 ルーヴルへ行く』『ある役者達の風景』、大河ドラマ『いだてん～東京オリムピック噺～』『新選組！』、ドラマ『アンチヒーロー』『家康と三成のスマホ』などがある。

【主な舞台】『アヴェ・マリターレ！』『神戸の湊、千年の交々』『海をゆく者』『アメリカの時計』『エドモン』『イヌの仇討』『海王星』など。新国立劇場では『桜の園』『エドワード二世』『羅生門』に出演。



大沼百合子 ONUMA Yuriko 羽田君江(母)

1988 年、宝塚歌劇団を退団。以降、テレビドラマ、映画、舞台など活動の場を広げる。これまでの主な出演に映画『総理の夫』『SHELL and JOINT』『金融腐蝕列島[呪縛]』、連続テレビ小説『花子とアン』『どんど晴れ』、大河ドラマ『篤姫』『元祿繚乱』などがある。

【主な舞台】『橘に鶯』『路上 7 インパーフェクト・デイズ』『天才バカボンのパパなのだ』『エミリア・ガロッティ/折薔薇』『この雨やむとき』『カミの森』『ようこそ、ミナト先生』『SHELTER』『誤解』『アトレウス』『青春の門～放浪篇～』など。



関口アナン SEKIGUCHI Anam ————— 羽田定男(僕)

2016年、テレビドラマ『僕のヤバイ妻』で本格的に俳優デビュー。これまでの主な出演にドラマ『私の町の千葉くんは。』『サニー』『たそがれ優作』『今際の国のアリス』シーズン2、『イチケイのカラス』、連続テレビ小説『エール』、大河ドラマ『いだてん〜東京オリムピック噺〜』などがある。テレビバラエティ番組「ブレバト!!」では特待生として水彩画の腕前も披露。

【主な舞台】『Crash』『熱海殺人事件 モンテカルロ・イリュージョン』『デンギョー！』『グッドラック、ハリウッド』『十二人の怒れる男』など。



田実陽子 TAJITSU Yoko ————— 羽田可奈(妹)

同志社大学在学中に同志社小劇場へ参加。2005年、劇団方南ぐみに入団し、劇団公演に出演。07年、連続テレビ小説『ちりとてちん』にレギュラー出演。これまでの主な出演に短編映画『スイート』、映画『るろうに剣心 伝説の最期編』、ドラマ『黒鳥の湖』『4号警備』『犯罪症候群』などがある。本年4月に舞台『猫と小判』への出演が控えている。

【主な舞台】『三月十一日の夜のはなし』『ラブイデオロギーは突然に』『かみさまを殺すための旅』『It's not a bad thing that people around the world fall into a crevasse.』『ある母の記録』『回復』『陽だまりの樹』『鳥取イヴサンローラン』『THE 面接』『僕たちの好きだった革命』など。



坂東 希 BANDO Nozomi ————— 才谷レイ(彼女)

ダンス&ボーカルグループである Flower、E-Girls の元メンバー。2012年、ドラマ『GTO』に出演し本格的に俳優として活動を開始。ファッションモデル、ダンサーなど活動は多岐にわたる。これまでの主な出演に映画『正欲』『ダンシング・マリー』『虹色デイズ』、ドラマ『最高のオバハン 中島ハルコ〜マダム・イン・ちょこっとだけバンコク〜』『嘘解きレトリック』『テッパチ！』『プロミス・シンデレラ』などがある。

【主な舞台】『屋下がりの思春期たちは漂う狼のようだ』『舞台 破天荒フェニックス』『芸人交換日記』『This is a お感情博士！』など。



松本哲也 MATSUMOTO Testuya ————— 羽田庄吾(兄)

2010年、劇団小松台東を旗揚げし、主宰・劇作・演出・出演を務める。劇団公演以外にも外部への書き下ろし、演出・出演も多数。これまでの主な出演にドラマ『新空港占拠』『相棒season22』『アナウンサーたちの戦争』、大河ドラマ『鎌倉殿の13人』など。また、ドラマの脚本に『東京センチメンタル』『竹内涼真の撮休』『サヨナラ、えなりくん』なども手がける。本年5月に劇団公演『ソファア』が控えている。

【主な舞台】『デンギョー！』『地獄は四角い』『再会(仮)』『オイ！』『左手と右手』『シャンドレ』『東京』『てげ最悪な男へ』『さなぎの教室』『神舞の庭』『目頭を押さえた』『泥の中』『山笑う』『バカシティ』『どんてん』『東京アレルギー』『海と日傘』など。

公演概要

【タイトル】 シリーズ「光景—ここから先へ—」Vol.3『消えていくなら朝』

【作・演出】蓬萊竜太

【美術】小倉奈穂

【照明】阪口美和

【音響】工藤尚輝

【衣裳】坂東智代

【ヘアメイク】田中順子

【演出助手】橋本佳奈

【舞台監督】下柳田龍太郎

【芸術監督】小川絵梨子

【主催】新国立劇場

【キャスト】 大谷亮介、大沼百合子、関口アナン、田実陽子、坂東 希、松本哲也

【会場】 新国立劇場 小劇場

【公演日程】2025年7月10日（木）～27日（日）

※開場は開演の30分前です。

【料金（税込）】

A席 7,700円／B席 3,300円／Z席（当日）1,650円

【一般発売】2025年5月6日（火・休）10:00～

【チケット申し込み・お問い合わせ】

新国立劇場ボックスオフィス TEL: 03-5352-9999（10:00～18:00）

新国立劇場Webボックスオフィス <https://nntt.pia.jp/>

* **Z席1,650円** Z席は、公演当日朝10:00から、新国立劇場Webボックスオフィスおよびセブン-イレブンの端末操作により全席先着販売いたします。
先着販売後、残席がある場合は、公演当日朝11:00からボックスオフィス窓口でも販売いたします。※電話予約不可。

* **当日学生割引** 公演当日残席がある場合、Z席を除く全ての席種について50%割引にて販売。要学生証。電話予約可。

* **各種割引** 新国立劇場では、高齢者割引（65歳以上5%）、障がい者割引（20%）、学生割引（5%）、ジュニア割引（小中学生20%）、アトレ会員割引（5～10%）など各種の割引サービスをご用意しています。

【新国立シアタートーク】

日時: 7月16日（水）終演後

出演: 蓬萊竜太、全キャスト

司会: 中井美穂

入場方法: 本公演チケット（いずれの日程でも可）をご提示ください。

シリーズ「光景—ここから先へと—」作品

シリーズ「光景—ここから先へと—」Vol.1 海外招聘公演『母』



『母』舞台写真 提供:ブルノ国立劇場

まさに現在の世界情勢をうつしとったかのような演出で、2022年4月の初演以来、国内外で高い評価を得ている、チェコ、ブルノ国立劇場ドラマ・カンパニーによるカレル・チャペックの名作『母』。現在もレパートリー作品として上演している本作を新国立劇場にて日本初演します。

公演期間:2025年5月28日～6月1日

会場:新国立劇場 小劇場

作:カレル・チャペック 演出:シュチェパン・パーツル

出演:ブルノ国立劇場ドラマ・カンパニー

シリーズ「光景—ここから先へと—」Vol.2 『ザ・ヒューマンズ—人間たち』



劇作家・脚本家として活躍するスティーヴン・キアラムのヒット作、『ザ・ヒューマンズ—人間たち』。マンハッタン of 老朽化したアパートを舞台に、感謝祭を祝うために集まったある家族の会話から、貧困、老い、病気、愛の喪失への不安、宗教をめぐる対立などが浮かびあがる一夜の物語です。

公演期間:2025年6月12日(木)～29日(日)

会場:新国立劇場 小劇場

作:スティーヴン・キアラム 翻訳:広田敦郎 演出:桑原裕子

出演:山崎静代、青山美郷、細川 岳、稲川実代子、増子倭文江、平田 満

＜お得なセット券のご案内＞

シリーズ「光景—ここから先へと—」通し券
『母』『ザ・ヒューマンズ—人間たち』『消えていくなら朝』A席

料金(税込) 20,700 円

お申込先:新国立劇場ボックスオフィス 03-5352-9999

(電話と窓口のみ)

※3作品のいずれかが完売、または『母』公演が終了した時点で通し券の販売は終了します。